

「万国の文学よ、団結せよ！」

アルゴリズム・クローンの時代に

鈴木 章能

アメリカで女性参政権（憲法修正第十九条）が 1920 年に承認されて以来、またそれ以前から、様々な運動や闘いが展開され、女性の政治進出や法の整備が進められてきた。いまや女性の社会進出も進み、100 年前とは雲泥の差となっている。もっとも、法整備は進めども問題は常に残ってきた。そうした法や政治の「取りこぼし」や「見過ごし」の部分こそが人々に筆を執らせてきたと考える。例えば、白人の従軍看護師が登場するヘミングウェイの『武器よさらば』は、母性主義の全米女性参政権協会が第一次世界大戦への協力の見返りとして白人女性に限った女性参政権を手に入れたからこそ生まれ得た作品であることを考えるとき、看護師とお腹の中の子どもの命が危ぶまれる結末は、女性の社会進出のために戦争が選択されたことへの異議申し立てとして、また法と政治と女性の幸福への疑義として描かれたのではと想像したくなる。大戦後の社会を舞台にした『グレート・ギャツビー』のデイジーと男たちとの関係にアメリカの帝国主義やアメリカ的・資本主義的価値観が批判的に読まれ得るのも、女性参政権承認がアングロサクソン白人男性中心の政治と社会秩序を規範としたアメリカ化に基づく改革と、アメリカ的価値観を対外的にも拡大する帝国主義、アメリカニズムに基づく政治への女性の参画を求め、遂行することで実現したことが反映されているからであろう。参政権獲得後は女性の福祉の法整備が着手されるが、1920 年代末以降の大不況で労働は各家庭に一つの割合で男性労働者に配分され、福祉の法も男性を対象とするものになると、互助や貧者の連帯を前景化しつつ、白人男性中心の資本主義社会の失敗のツケを、ろくに食べることもできない女性の身体にまわしている“リアルな”世界が描かれる。

ところで、現代の問題は何か。そして文学はどう関与しているのか、またいけるのか。かつて三浦玲一は、ポストフェミニズムと第三派フェミニズムは新自由主義における新たな女の差別を助長していると看破し、両方が連帯することによる新たなフェミニズムの可能性と必要性を主張した。端的に言えば、世界全体をきちんと俯瞰し、“階級”を越えた連帯によって女の特権化がマイノリティ化とならない状況、つまり女同士の、そしてあらゆる性差を越えた平等を作ることであり、具体的には家事労働、出産、育児をまじめに論じ、平等な労働として社会構造に組み込むことである。そうすれば社会も変わる。もっとも、この宿題はなかなか難しい。まじめな議論が、例えば「代行者」のリクルートの議論にずれているいま、新たなフェミニズムの具体像はいまも課題のままに留まっている。一方で、労働主体や賃金の有無の如何に関わらず平等な労働者になったとてネオリベラルなグローバル経済の主要資本として回収される可能性がある。加えれば、労働のみならず私的領域も情報通信ネットワークのアルゴリズムに侵食され、グローバル経済の社会構造に組込まれている。かつてクリスティヴァは「資本主義は〔各人の〕主体に反抗の権利は与えるものの、鎮圧する権利は手放さない」と言ったが、振り返ってみれば、アメリカにおける女性の闘いは常に巧みに資本主義とその政治に回収されてきた面がある。昨今では、ジェンダーやセクシュアリティの理論に大きな影響を与えたフーコーらが新自由主義を推し進めたのではという議論も出ている。フランスの左翼主義者たちは毛沢東のマオイズムに心酔していたものの文化大革命の凄惨な実態を目の当たりにして、人権擁護、女性運動、ゲイ解放、環境主義など日常生活の政治批判に修正転換し、革命的教条主義が最終的に差異への権利の熱狂的称揚となった。アメリカのラディカル・フェミニストもマオイズムを自分たちの運動に適用したと明言している(see Harnish)。もちろん、そうした中で女性解放や法の整備が進んできたことは喜ぶべきことである。だが当時の冷戦構造もあって、資本主義の犠牲者より差異の犠牲者に焦点が絞られすぎたことが「取りこぼし」だったことはないだろうか。もしそうであれば、まずは経済至上主義の理念を主体的に、そして盲目的に演じる個の再生産に歯止めをかける必要がある。そのためにも、社会全体を俯瞰するための文学と、それによる想像と異議申し立てが重要となる。

しかし、その文学がいま周縁化している。この周縁化は現代の女性の問題と同根である。ラグラーヴは、現在の女性は自分たちのためのあらゆる法に満足し、勝利に酔いしれているが、実際には「数々の不平等が、根強く残っているにもかかわらず、それらはだんだんと『みえ』なくなっている」(738)と言う。その不平等について、ラグラーヴは労働と教育に注目する。労働市場には競争力と資格がものをいう市場と、たいした資格もいらぬ、低賃金の市場がある。この二重市場は利益を生み出すための社会的・政治的構造の産物であり、かつ前者が男性、後者が女性の市場と区別されて再生産される。またこの二重市場の強化ならびに参入は学校が生む格差に基本的に基づいている。そして、「女性が男性の『第一』市場に参入すると、その直後の結果として〔女性という身体的〕差別が強化される」が、メディアのスーパーウーマン表象や男女平等を宣言すると

いう覆いで包まれて、「この差別がそこでいかに強化されるのかをみようとも、説明しようともしなくなり、また「性別による区分」を正当化して作り出される「社会的機能に対して眼を閉ざす」(725)。それによって「日々の差別という現実と格闘している女性たちの立場を、いっそう悪くしている」(739)。そうした状況を作り出す学校教育は、ますますグローバル経済における男性の市場での労働者育成に走っている。そこでは、文学は投資に対する見返りに資さないために不要であるとされる。つまり、現代の女性の問題とその原因は、文学のマイノリティ化とその原因と同根であるということであり、またラグラヴの見立てに従えば、ネオリベラルなグローバル社会において男性の市場に参入しようと職業訓練を受ける男性たちはもちろん、女性たちからも文学は女性の市場の仲間として避けられることになる。そうした教育環境の下では似たようなコモディティが再生産される。オサリヴァンはこれをクローンの再生産と言い、そのような社会の様子が中国の文化大革命期に似ていると指摘する。知識人や学生たちは農民となって働く下放を免れ、同時に彼らと自己を差異化するために、マオイズムを受け入れていった。また、知に関与する人々が民衆を教育する側に回り、自分で考えさせるのではなく社会で生き抜くための情報を提供することで、同じ考えや思想をもった存在が再生産された。生き延びるために、クローンが再生産されるという点ではグローバリズムとコミュニズムに大差はない。

かつては、性差や資本主義をも滅ぼす有効な手段として情報通信技術が期待された。しかし、いまは労働も日常もグローバル経済と密接に連結したアルゴリズムに統治されている。GAFAに代表されるように、個人の情報が蒐集され、嗜好が確認され、クラスター化した似たような情報や商品が提供される。これは特定の技能がなくてもネットにつながれば起こることで、属する市場の性差は関係ない。どの市場の女も男もアルゴリズム的に繋がったクローンであり、立派なグローバル経済の共同体になっている。加えて、SNS等の日常化によって、出会いという行為が身体全体の動きではなく、電源とネット接続の環境下での一回のクリックに等しくなっている。それは連帯というよりバラバラの状況である。資本主義経済に直結した情報通信工学による現代人の思考の同一性と肉体的孤独の状況を、オサリヴァンはクローンリネス(Cloneliness)と呼んだ。クローンリネスな人々は、時に、多様性の尊重という概念に支えられた多文化主義を各々の自グループ中心主義に反転させて孤独を回避する。同時に個々の嗜好等によってもクラスター化される。こうしてグローバル経済に統治された「群衆」がいくつも生まれる。その「群衆」が教育の格差に応じて男性の市場か女性の市場に属している。

ところで、こうしたことは、SF小説などでかねてから予想・警告されていた。例えばスターリングの『ネットの中の島々』やスミス「クラウン・タウンの死婦人」などがある。後者では人間の家系である“The true human”「真人」と、家事と出産、育児に従事するネズミや犬などの家系である“the underpeople”「下級民」の二種類があり、女性の市場に生きる者への差別が描かれる。その「下級民」は連帯をもって革命を起こして社会を変えようと言う。その革命とは「真人」に「愛しています」と繰り返し言うことであるが、結局、「下級民」はすべて殺される。ドン・デリーロの『マオII』にも様々な「下級民」や「群衆」があり、「下級民」が中心人物の女性に「愛しています」と何度も言うものの、彼女は「接触」を忌避し、彼らのもとを素通りする。こうした社会全体を描く作家の死とそれに代わるテロリズムという構図をもち、そうなった社会の背後に毛沢東が見え隠れするという『マオII』は、まさに現代社会を俯瞰するリアリズムと言っていいだろう。また、俯瞰的でなくても諸々の個別の事象を世界の様々な作品がいまも描いている。それらを統合するとき、やはり社会全体が俯瞰できる。ここで最悪と考えられる事態は、社会が描かれなくなったときであろう。『マオII』では作家が死ぬ。しかし、そうしたことが描かれるという行為が起こっている限り、作家も文学も実際には死んでいない。

文学は、いま、どのような性偏差の作家であろうと、女性の市場の仲間として男性の市場と自分のいる女性の市場を眺めているし、眺めてきた。そうであれば、文学・文学者の団結こそが、新たなフェミニズムではないだろうか。現在のグローバル社会における女性の連帯と闘いとは、万国の様々な文学・文学者が対等な関係で団結し、いまの、またいまに至った差別的な社会、また取りこぼされた問題を描き、伝え、意義を申し立て、意見を発し続け、法に守られていると思いついで経済至上主義の社会を主体的に、盲目的に生きる結果、抑圧され差別され続ける男性市場の女性と女性市場の女性(そして男性)の再生産に歯止めをかけることではないだろうか。フェミニズムは、イズムである限り、行為実践による現実化の過程であり、新しいフェミニズムはアメリカの判例法と同じく常に上書きすることである。文学の、つまり女の議論をとめないことが重要であろう。

Works Cited

Hanisch, Carol. “Impact of the Chinese Cultural Revolution on the Women’s Liberation Movement.” Retrieved November 20, 2019. <http://www.carolhanisch.org/Speeches/ChinaWLMSpeech/ChinaWL.pdf>.

O’Sullivan, Michael. *Cloneliness: On the Reproduction of Loneliness*. New York, NY: Bloomsbury, 2019.

ローズ＝マリー・ラグラヴ「後見つきの解放—二十世紀における女性の教育と労働」天野知恵子訳『女の歴史V』杉村和子・志賀亮一監訳、藤和書店、1998、pp. 691-741.